

新聞記事感想文コンクール大賞受賞！

関川小学校6年 高橋正汰さん(大石)

第24回新聞記事感想文コンクール(県新聞活用教育推進協議会主催)で、県内小、中、高校などから1510点の応募があり、その中から関川小学校6年の高橋正汰さん(大石)の作品「羽越水害50年特集を読んで」が見事大賞に選ばれました。

このコンクールは、新潟県教育委員会をはじめ、新聞発行6社や新潟大学、上越教育大学などが協力して、新聞活用教育を推進するために実施しているものです。

10月23日には、関川小学校で表彰が行われ、県新聞活用教育推進協議会の伊藤充会長より、賞状と記念盾、副賞が手渡されました。

受賞した高橋正汰さんは、「新聞を読んでいて、今年は羽越水害の記事を目にするのがたくさんあったので気になって感想を書いた。おじいちゃんに当時の経験を聞いたことも書いたのので、自分のことも書いてくれてありがとうって喜んでくれた。これから新聞を読む時間を増やしたい」と喜びを語っていました。

関川小学校は、昨年から新聞教育活用の実践・研究委嘱校にもなっていて、今月22日には、研究発表会も予定されています。

伊藤会長は、「良い文章を書いてくれて、お礼を言いたい。新聞活用教育に取り組んでいる関川小学校から大賞が出たことは、本当にうれしい」と話していました。

サツマイモ掘りで世代間交流 垂水の里で200kg収穫！



秋の肌寒さを感じる10月16日、特別養護老人ホーム垂水の里(鈴木忍施設長)では、保育園年長児34人と湯沢老人クラブ「友愛会」会員11人を施設の菜園に招き、春に植えたサツマイモの収穫作業を行いました。

この日は、入所者が笑顔で見守る中、友愛会がツルを刈り取ってくれた菜園で、園児たちが寒さに負けず、元気にサツマイモを掘り起こしました。収穫したサツマイモは、約200kgありました。下関保育園児のひ孫と参加した友愛会の渡邊忠幸さん(沢)は、「地元の施設でかわいいひ孫と一緒に土に触れる機会が持てて楽しかった」と話していました。

作業終了後には、垂水の里で準備したおやつをみんなで食べて、園児のかわいい姿に入所者や友愛会のみなさんが笑顔になりました。(表紙参照)

大蛇伝説の原典を現代語訳 村民の皆さんに読んで欲しい！

元高校教師の平田昭さん(村上市藤沢)が、村の大蛇伝説などを記した「大里峠大蛇由来」(中村鶴五郎著)と「越後国関鎮寺座頭之宮由来」(十返舎一九著)を現代語訳し、9月29日、村に寄贈されました。

平田さんは、2冊の現代語訳したものがないことを知り、やってみようと今年の7月ごろから語訳を始めました。本の状態が悪く読解不能な部分もあり、文脈から本文を想像するなどの苦労を重ねました。

冊子を受け取った平田大六村長は、「素晴らしいものを頂いた。小学校や中学校でも活用し、大蛇伝説を身近なものにしていきたい」とお礼の言葉を伝えました。

寄贈いただいた本は、せきかわ歴史とみちの館で閲覧することが出来ます。



◀現代語訳をした平田昭さん(左)

関川小5年生児童 学校田で稲刈りを体験

10月10日に関川小学校の5年生児童が、下関市内にある学校田において、稲刈り体験学習を行いました。5月下旬の田植えに続きまして、JA職員のほか、地域の皆さんなど10人がボランティアとして参加しました。今年は雨の日が続いたため、実った稲は倒伏し、田んぼもぬかるむ状況でしたが、児童たちは楽しそうに慣れない手つきで鎌を使い、10株ごとにひとまとめにしていました。

笑顔で作業をがんばった奥野明飛さん（下関）は「はじめて稲刈りをしたけど、すごく楽しかった。ご飯が大好きなので、はさかけした米を食べるのが楽しみです」と話していました。

はさがけで乾燥させた稲は、10月26日に脱穀作業を行いました。収穫されたお米は、PRのため村外に出かけ無料配布するほか、学校給食などで使用される予定です。



旭日単光章を受章 大島 茂さん（上野新）



村議会議員を4期16年務められた大島茂さん（上野新・88歳）が、このたび旭日単光章を受章され、10月6日に役場応接室で伝達式が行われました。

大島さんは、29歳の昭和34年に村議会議員に初当選、当時の議会で最年少議員として、その若い力と行動力で地域活性化に多大な貢献をしました。また、文教、総務委員長を歴任し、豊富な経験と卓越した識見をいかに発揮され、地方自治の発展に力を注がれました。

平田大六村長から章状と勲章の伝達を受けた大島さんは、「羽越水害で救援物資の配給に奔走したことを思い出す。村民として当然の努めと思い行ってきた議員活動であったが、今回受章をすることが出来て、村民のみなさんにあらためて感謝申し上げたい」とお礼と感謝の言葉を述べられました。

受章おめでとうございます。



稲刈りも終わりに差しかけた10月10日、平成30年産米の生産に向け、関川村農業再生協議会の総会が開催されました。総会には、県や村、にいがた岩船農協をはじめ、農家組合長の代表など農業関係者が出席しました。

平成30年から、国からの生産数量目標の配分が廃止され、生産者や集荷業者などが販売戦略に基づき需要に応じた生産・販売を行うこととなります。

総会では、関川村における

新たなコメ政策に向け

岩船米生産の方向性を決定！

関川村農業再生協議会総会

岩船米生産の方向性について検討が行われました。

総会では、平成30年産の生産数量目標については、村で独自設定するとし、

①平成28年産米の生産数量目標を活用し、11月に目安としての生産数量を生産者に示し、その集計で村全体の主食用米の全体数量を把握します。

②把握した全体の予定生産数量を方針作成者で協議後、来年2月に確定生産数量目安を生産者に提示するとしてしました。

また、集落別の水稲共済単収を用いて個人ごとの単収を設定し、生産数量の確実な把握を図ることも決定しました。10月23日から行われた集落説明会では、「今年は作柄が良くなかったけど、JAの需要がたくさんあると聞いたので、30年産に向けてやる気がでた」「関川村米などの独自販売ができないものか」「米価が下がらないか不安」と生産者は話していました。